神戸新聞 夕刊 2026年11月25日

日銀神戸

支店長の視点

大関雄資氏



思いがけないアナログの効用

先日、仕事で大阪の難波に行く機会があった。三宮との往復は、往路は所要時間が最も短いJRと大阪メトロ御堂筋線の乗り継ぎ、復路は運賃が最も安い阪神電車とした。所要時間と運賃を即座に比較できるスマホの経路検索アプリは、確かに便利だ。

他方で、関西勤務が初めてで、大阪の地理にもとんと不案内な筆者には、難波と言われてもそれがどのあたりにあるのか皆目見当がつかない。それで久しぶりに紙の時刻表を購入した。子供の頃に夢中になって眺めたJTBのB5サイズのあれだ。

パラパラとページを繰るうちに、少年時代の甘美な思い出が鮮やかによみがえる。索引地図の独特の形状や、紙の質感やにおいが、忘却のかなたに追いやっていた深い記憶を呼び戻すきっかけとなったようだ。視覚に加え触覚と嗅覚をも動員できるのが、紙のよさだろう。

さらに紙のよいところは、その一覧性の高さだ。B5の時刻表は見開きにするとB4だから、例えば新快速が普通列車に比べどれほど速いのかなど、当面の目的とは直接関係ない余計な情報がたくさん入りこむ。しかしこれが次の旅程の検討に際し、肌感覚に基づく示唆を与えてくれるなど、思わぬ効用を発揮する。

偶然の発見から新しいアイデアが生まれることを、セレンディピティという。結果に無駄なく到達できるデジタルは確かに便利だが、ことセレンディピティの誘発に関しては、アナログに軍配が上がる。

無駄にみえることが実は無駄でないところに人生の妙があるように、デジタル万能の世の中で意図的にアナログを取り入れるのは、意外と大切なことのように思う。